

## 施餓鬼会祭文

琵琶湖湖南の東方山安養寺は奈良時代天平のいにしえに創建され薬師如来 観世音菩薩の聖地にして弘法大師を中興の祖と仰ぐ名利なり。境内は東方山の山麓に広がり青毛氈もうせんを敷きつめたようなコケの庭に松やモミジが林立。いま緑濃く盛夏を迎える。

関東地方では、既に七月にお盆の行事も終って関西ではいよいよこれからが本番になる。死者を弔い自他ともに生き返るのがお盆会であるが、追善供養の正念場は何んといっても遺族の信仰 信心 信行の開発にある。とくにお盆中は日本民族の大移動といわれ、ふる里へ帰省きせいの車で、高速道路は数珠じゆずつなぎ。新幹線の乗車率は百パーセントを越える。

それに共なって各地で行なわれるお盆行事にこの際、深く仏ぶつ眼げんを点じて文字どおり信仰という心を開いて参加したいものである。祖先崇拜を戴いた上にもう一つ真からの仏弟子となるう。大都市の騒音は喧かまびすしい。職場の人間関係のわずらわしさ、ノルマの達成など現代社会に生きることが容易ではない。このような束縛そくばくから脱のがれて、本日まで参詣下された法要でお経と大師流慈苑講のご詠歌に丸め込まれて戴きたい。そうすれば内外の束縛から一瞬たりとも解放され人間の復活、心のご安心あんじんが戴けるものと信じている。

この法要は盂蘭盆会と施餓鬼会えんがいで観音堂縁外には施餓鬼棚だなが設

けられ謹しんで香花 荼蘼・百味・五菓の稀膳を備えて一切の飢類きりいに  
供きょうず。

伏おもんみして以みぎりれば釈尊在世の砌、十大弟子のなかで最高位におら

れた目蓮尊者がその母、名を精提女せいだいめという者。生前に物を惜しみ、

むさぼり全くなさけ心ごころのない業因ごういんから死後に地獄へと落ち、餓鬼道

をさ迷くげんう苦患を受けていた。山林じゅかの樹菓も刀剣となってその身を切

り、河川かせんの流水も火焰かえんとなって胸を焦こがす。そのむごたらしい姿をつま

びらかに見せられた目蓮尊者は、非母の苦惱くげん・苦患を悲しみ声をあ

げて泣き呼しるけび、まるで嬰兒。あかごのようだと記しるされている。目蓮

尊者は神通力そなを備え特に羽ばたいて飛行が自由にできる通力の持

主であったが、それも全く及ばなかった。仏道を極めた悟道ごどうの威風、

徳風も全て失こうむつて、失意のなかからひたすら釈迦如来の教えを蒙り、

結果目蓮尊者は種々の妙薬さんごを三五の朝あしたに儲もうけ、微妙くぐの供具くを九

旬じゆんの夕べに捧ささげて自恣じし即ち安居あんごの修行の僧侶及び一切の三宝に献

じた。すると忽たちまちにして鬼界くげんの苦患に苦しむ悲母精提女まねが すみやは免れ速

かに淨妙じょうみょうの快樂けらく、心地よさを得たりと説かれている。

この故事をもって、そもそも施餓鬼の法というのは、苦海を渡し

きる。船”で、さらに楽岸へ渡しきる。橋”の役割を果すと云われ  
る。

これによって高祖弘法大師は帳に録して七魂を吊い、源仁僧都  
は名を列ねて迷霊を法力をもつて資ける。このように先賢既に斯く  
の如し、後愚蓋ぞ勤めざらんや。

信は莊嚴より生ず」と勧められ、安養寺熊谷俊亮住職は率先  
して寺内の奉仕者と共に浄化に身を粉にす。本堂 観音堂はお香の  
香り絶えることなく芬芳の妙花捧げ奉てまつられる。本日も嚴そ

かに法要を執り行うに精霊を迎え、清浄の冷水を掬んで七魂に  
洒ぐ。そして名字を呼んで梵鐘を打つて、人数を拾って廻向を施  
す。先ず三国伝灯顕密の諸大師、一字教授の祖師先徳、七世の

父母、殊には今日の施主各々志を運んで念ずる所の一切の  
精霊、六親眷属親昵同朋同侶、一宿多年志施檀越、一文半偈  
結縁の弟子、その他在々処々鬪諍合戦の群霊、年々歳々餓死病死

の幽魂、或は少分の志を運んで念ずる所の靈魂、或は有縁  
無縁隔りを捨てて弔う所の亡魂、この数繁多なり、翰墨に遑あ  
らず。

皆この砌みぎり普あまねく来きたつて当とう会えに集り、同じく甘かん露ろの法ほう味みを嘗なめて  
餓が鬼き饑き饉きんの苦くしみを離られ、解げ脱だつの法ほう樂らくを受うけて浄じやう土どの樂らくしみに到いた  
らんのみ。

乃至法界 平等利益

平成二十八年八月七日

京都府向日市寺田町

亀光庵

住職 土口哲光